

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370973

研究課題名(和文)現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究

研究課題名(英文)A Cultural Anthropological Study of Locality in Italy

研究代表者

宇田川 妙子(UDAGAWA, Taeko)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・教授

研究者番号：90211771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近年グローバル化の一方で、ローカルなものへの注目が高まっている。本研究は、そのなかで改めてローカル、ローカリティが何かを考えるため、元来ローカルな文化が強いとされるイタリアにおいてローカルコミュニティの事例調査を行い、理論的な再考も行った。その結果ローカルとは、それ自体でグローバルと二項対立的に存在するものではなく、グローバル、ナショナル等の関連の中で再編されること、ゆえに近年のローカルブームには批判的視点も必要であること、また近年はローカルな場にこそグローバル等の他の空間が重なるようになり、時間観とともに空間観の再編が起きていること等を明らかにし、新たなローカリティ論への足掛かりを得た。

研究成果の概要(英文)：Today “the local” has been a very noteworthy issue in the globalization. But what is the local, locality? Answering this question is the aim of this study, looking up the theoretical documents and doing field research in Italian local communities. Results are; the local is not a priori ontological entity opponent of the global, but a reconstructed and reconstructing one with the global, the national, and so on. So contemporary various phenomena relevant to “the local” must be revisited critically with this view. And these days we must understand the local site as a place where the combination of multiple spatialities of organizations, praxis, and belonging at a distance would become possible. It means that our concept “place/space” with “time” is now being reconstructed drastically, too. I believe it’s an important clue to innovate the locality theory.

研究分野：文化人類学

キーワード：ローカリティ イタリア グローバリゼーション ローカルコミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1)現在グローバル化とともにローカルなものに再び注目が集まり、ローカル・コミュニティ(以下LC)復興の動きは世界的に盛んである。しかし人類学や社会学等ではLCへの関心は衰退する一方で再考論は本格化せず、グローバル化研究においてもLCの資源としての意義以外の議論は成熟していない。

(2)本研究が具体的事例として扱うイタリアは、すでに私が長年調査を続けている地域である。また、LCへの帰属意識が国家へのそれと比較して強いと言われ、そのせいか近年、地域振興の動きが活発になり、すでに社会学、政治学、都市計画学などにおける研究も増えている。このことから、イタリアの事例は、LC、ローカリティとは何かを考える上で極めて示唆的なものの一つとなるに違いない。

## 2. 研究の目的

(1)モデルケースとしてのイタリアの事例研究

最大の目的は新たなローカリティ研究の構築だが、期間内では、イタリアのLCで暮らす人々のローカリティの意味を、グローバル、ヨーロッパ、国等との相互浸透に即し、歴史的な変遷にも着目しながら詳細に明らかにすることを目的とする。その成果のみならず研究の過程そのものが、ローカリティ研究のモデル事例となると考える。

(2)ローカリティ研究の理論的基盤にかんする試論の提示

アパデュライは(「ローカリティの生産」『さまよえる近代』2004年翻訳所収)、現代社会においてLCやローカリティの意味が本当に無くなったわけではなく、とくにローカリティを規模や空間の問題ではなく、直接的な関係の感覚等からなる社会的属性(彼の言葉では「近縁」)と見なすという興味深い議論を展開している。本研究でもこの視点を生かし、これまで蓄積されている人類学のみならず他の諸分野における事例および理論的研究とともにさらに検討し、新たなローカリティ研究の理論的基盤にかんする試論をまとめる。

## 3. 研究の方法

(1)イタリアでのフィールド調査研究

具体的には、私が1986・87年に長期間の調査をし、以降も継続的に調査をしているローマ近郊の町(以下R町)で、人々の町とのかかわりや帰属意識、町の変化、近年の地域振興策や町興し運動について調査する。その際、町民の属性の多様性や、町を取り巻く周囲の社会(地方、国、グローバル市場、メディア、ネットなど)とのかかわりやその変化にも注目する。またイタリアは地域差も大きいいため、別の地方のLCを選択して比較調査を行う。

(2)イタリアの地域政策等の歴史の変遷にかんする文献研究

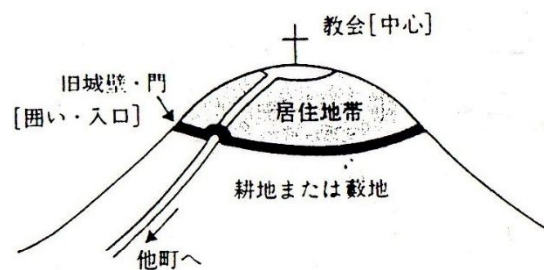
イタリアにおける地域、国家等のあり方及び関係性について、大きく近代以前、近代以降、ここ数十年(EU化の進む1990年代以降)に分けて、国家制度・政策、人・モノ・情報の移動などの点に着目して文献による調査を行う。とくにR町とその周辺に関しては詳細な研究を行う。

(3)ローカリティ研究の理論にかんする研究

とくに1990年代以降、グローバル化が進んだ影響もあって、人類学のみならず社会学、人文地理学などにおいて新たな空間論が数多く生まれている。また、グローバルとローカルの関係性についての議論、ローカルな地域振興に関する調査研究についても現在かなりの蓄積があると考えられるので、それらを渉猟し、その動向及び論点をまとめ、検討していく。

## 4. 研究成果

(1)イタリアにおけるLCへの帰属意識：その歴史と形成構造



イタリアでは従来から、町への帰属意識(カンパニリズムと呼ばれる)が高いといわれてきたが、実際、本研究におけるR町での調査のみならず、これまでの数多くの人類学的な調査報告の精査からも、その単位性は物理的にも象徴としても高く(上の模式図参照)、人々のアイデンティティにも深くかかわっていることが明らかになった。しかし、歴史的な資料や研究からは、それは同時に近代化の過程で強化され変容した側面(行政の介入や州という地域の重要性の高まり等)があることも浮かび上がった。

さらに言えば、町は閉鎖的に見えても、近代以前から常に外部との関係を有しており、外部社会にかんする情報やイメージも豊かだった。そもそも、LCのアイデンティティそのものが、構造的に外部社会との関係のなかで生じ、形成されるものであることも忘れてはならない。この視点は、しばしば印象論的な議論に陥りがちなイタリアのカンパニリズムを、イタリアの特異性という議論に拘泥することなくLC一般の議論に適切に位置づけるうえで重要となる。

(2)イタリアにおけるローカル(町、地方等)、国家、ヨーロッパ、グローバル等の複雑な関

## 係性

近代以降の文献資料および研究業績からは、イタリアにおけるローカルなもの(とくに町)は、近代化以降、ナショナルなもの(とくに町)の形成とともに一旦軽視されるようになったが、国家の権力基盤が弱いせいもあって、人々の日常生活の次元では温存されていたことが浮かび上がってきた。

そして、とくに 1990 年代以降になると、グローバル化および EU 化を背景に、ナショナルなもの(とくに町)の対抗としてローカルなもの(とくに町)への関心が再表面化し、制度的にも地方分権化が進んだ。また、ローカルな市場への反発という観点からのローカルへの注目という動きもあり、それは、グローバル市場への依存度が高いイタリアでは、特に顕著だったと考えられる。また、さらにそこには、市民運動という、やはりある意味ではグローバルな動き・組織化や、グローバルな情報化という、別のグローバル化も関与している。ここからは、グローバルという位相においてもその性格・構造は多様であり、したがってそれとの関係で生ずるローカルも、複数化・複雑化していることが明らかになった。

そうしたローカル/グローバル関係の重なり合いや相互作用は、現在のイタリアのみならず、各地のグローバル現象を把握していくためには重要な着眼点となると考える。ゆえに今後は、そうしたグローバル現象の一例としてもイタリアにおけるその構図をさらに精緻化していくとともに、より一般的な理論化に向けた考察を続けていく。

### (3)食を通してみるローカル/グローバル：食にかかわる地域振興の事例研究

イタリアにおいて、こうしたローカルとグローバルの複雑な関係を最も端的に示しているのが、食にかかわる地域振興の動きである。

本研究では当初、スローフード運動から派生したスローシティ運動に加わっている町の事例を扱う予定だったが、その運動が現在低調であり、また、私が関わっている別の研究プロジェクトを通して、現在世界的に広がっている食をめぐる諸運動にはグローバル/ローカル問題が非常に深くかかわっていることが浮かびあがったため、本研究でも食をテーマとする地域振興に取り組む LC の事例を選び、調査を行った。

その事例は、2010 年にユネスコ無形文化遺産に登録された地中海料理を用いて町興しを行っているナポリ周辺の P という集落である。この調査はまだ途上だが、これまで、地中海料理という概念の誕生、ユネスコ遺産への登録、観光・町興しの資源としての利用とアイデンティティとの関連などに焦点を置いて調査をしたところ、そこには P 集落の住民、全国規模の外部支援者(レガ・アンビエンテ、スローフード運動などのイタリア全土に広がる組織)、ナポリ大学等の研究者、

WHO、イタリア国家・政府、EU、ユネスコ国際機関、アメリカなどの外部の研究者やメディアなど、多様な次元の人々や見方が錯綜しながら関与しており、グローバル、ナショナル、ローカルなどの位相が複雑に入り混じっていることが明らかになった。

この点に関してはすでに論文や口頭発表等で中間的な成果を公表しているが、今後さらに調査を続け、その構図とその変化をより詳細に明らかにしつつ、上記の(2)の問題関心とともに理論化していく。

### (4)ローカル/グローバルにかんする理論的な再検討

ここ数 10 年、グローバル化や人・モノ・情報の移動の活発化、情報技術の進展などによって、我々の空間観、およびそれに結びつく時間観も大きく変容していることから、デビッド・ハーベイ、ジョン・アーリ、エドワード・ソジャなどをはじめ、空間観そのものを再考しようとする数多くの議論が多くの学問分野で発信されている。現在それらの議論は、グローバル化のさらなる複雑な様相が明らかになるにつれ、単純な place/space の二元論を越えて多様化している。本研究では、それらの動向の中でとくにローカル化(グローバル化)の動向に着目しながら立論している研究に注目して示唆を得ながら、イタリアの事例分析に援用した。

それは、たとえばアミンの議論(Amin, Ash 2002 "Specialities of globalization", in *Environment and Planning* vol.34:385-399)にあるように、現在の空間/場所感覚・実践においては、ローカルからグローバルにかけての様々なスケール空間が水平に組成されているのではなく、同じ地点に重なり合っているという考え方である。現代社会における空間は(もともと現代社会に限るわけではないが)、複数の・複層的に構成されているとも言える。ゆえにアミンは、politics of place ではなく politics in place が必要であり、現在起きている現象もそう捉えるべきであるという。また、この視点からグローバル/ローカルの関係性を問い直すことによって、食にかかわるローカル・ブームを再検討しようとする論集もすでに複数出ている(たとえば Inglis, David and Debra Gimlin eds 2009 *The Globalization of Food*. Bloomsbury.)

こうした空間観の再検討やローカル・ブームに対する考え方は、(3)の P 集落での地中海料理への取り組みの動きだけでなく、イタリアでのローカルな動向を再検証する上で非常に有効である。これらの議論では近年、local trap (Inglis and Gimlin eds 2009) 等という言葉が使われ、ローカルなものが単なるグローバルの対抗概念ではなく、むしろその所産であることを明らかにしてローカルなもの(とくに町)の功罪を的確にとらえようとしている議論が進んでいる。本研究では、その動

向を把握することによって、イタリアの事例の考察を深めることができたとともに、その事例をこの理論的な動向に貢献するものとして位置づけ提示するために、現在、論文の準備を進めている。

#### (5) イタリアにおける近年のLCへの帰属意識の変容からみるローカリティの意味

イタリアでも近年、たしかに町への帰属意識(カンパニリズム)は低くなっている。R町のフィールド調査でも若い世代ほど町への帰属意識・アイデンティティは低く、生活圏も町を越える傾向が強いことが分かった。

しかしその一方で、これまでも繰り返してきたが、町の特産品などを用いた町興し運動のように、町の歴史、伝統、特徴等を利用する動きも顕著である。たとえばR町では、特産のキノコの祭や、自生する珍しいスイセンにちなんだ祭などが行われており、また、P集落における地中海料理による町興しは、そうした動きの最たるものの一つである。

ただし、これらの動きは、いわば「資源としてのローカル」なものである。それゆえ、これは、(3)で述べたように複雑なグローバル/ローカル関係の所産でもあり、経済的政治的な性格が強い。さらにそれは、外部に対して広告等を通して大々的に表明されているとしても、よく見ると、LCの住民全体が関わっている動きではない。これによって利益を得るのは誰・どの集団や範疇はあくまでも一部である。とするならば、この側面は、たしかにLCの人々のまとまりやアイデンティティの表出・強化等のきっかけになりえるとはいえ、彼ら・彼女らのLCへの帰属意識やアイデンティティのすべてを説明するものではないと考えられる。

そのことを理解するには、実は、P集落に比較すると町興し運動が成功していないR町の事例が興味深い。本研究では、R町で「よそ者」とされている移住者たちについても、彼ら・彼女らにとってR町とは何かについて調査を行い、そこから貴重な結果を得た。彼らは地元民からは「R町人」ではないといわれ、伝統的な町組織からしばしば排除されるが、自分たちで組織化を行うなどして(ナルチーゾ、サンジョバンニ等の組織。その際、外部社会のネットワークともかかわりながら町内で組織化をしていることにも注目したい)、積極的に町の社会生活に参画していた。しかも移住者の若い世代では、近年の市民運動の影響もあってか、より積極的な姿勢が見られ、R町で最も活発な町興し運動を担っているのは、実は、彼らであった。

そして彼ら「よそ者」の多くは、自分たちを「R町人」とみなしている。その意識の内容を、彼らの出身地に対する意識・アイデンティティと比較しながら分析していくと、そこには、いわば対外的なアイデンティティとは異なる、即自的ともいえるような、「住む」ことをめぐる感覚が浮かび上がってくる。この

感覚は上述のアパデュライの「近縁」にも近いと考えられる。ただし、その感覚もまたグローバル化のなか、空間観・距離感の変化とともに構造的な変化を蒙っている可能性もあり、さらなる調査考察が必要である。

#### (6) 新たなローカリティ論に向けた今後の展望・課題：ローカリティにかかわる複数の位相に注目して

以上、本研究の成果は、R町とP集落でのフィールド調査から、イタリアのLCにおけるローカリティは、実は一つではなく、大別すると、資源としてのローカルと「住む」ことそのものにかかわるローカルとがあることを明らかにした。近年のいわばローカル・ブームは、前者のローカルにかかわるものであると考えられる。そうした資源としてのローカルを理解していくためには、近年の複数的・複層的な空間観(グローバル/ローカル関係)の構造を、イタリアの状況に即して適切に分析していく必要がある。その分析から、近年のローカル・ブームには、実はグローバル化の枠組みの中で馴化されている側面も強くあり、ゆえにより批判的な視点からの考察が必要であることを指摘した。そうしたイタリアの事例の適切な考察は、近年議論が進みつつある一般的なグローバル/ローカル論にも大きく貢献する。その一方で、ローカリティには、もう一つ「住む」という感覚にかかわる側面がある。それを安易に資源としてローカリティと混同することは、ローカリティの矮小化であり、ゆえに、それを含めた新たなローカリティ論を作り上げる必要があるとともに、それこそ現在のグローバル/ローカル論を乗り越えることの可能な議論につながる、等にまとめることができる。

以上は、現在すでに成果として公表しているものもあるが、まだ途上な部分も多く(とくに )、今後も、ことに理論的な一般化に向けて研究を継続する。

また、今回の研究において、計画時にはなかった食とローカルの関連についての調査研究を行ったが、このテーマは、ローカル/グローバル問題の複雑さの解明を追求していくためには格好の課題であることも明らかになった。しかも、そもそも食べることは何かを考えていくと、食にもやはり資源としての側面だけでない部分があり、ここから、今日のローカル/グローバルという枠組みを相対化する視点を得ることができると考える。ゆえに今後は、より具体的には食にかかわる事例研究に取り組み、考察を続けていくつもりである。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 4 件)

宇田川妙子、グローバル化の中を生きる食と「地域」、vesta 味の素食文化センター、no.109、2018、58-65、査読無

宇田川妙子、「共食」つくる地域と食のつながり、vesta 味の素食文化センター、no.108、2017、60-65、査読無

宇田川妙子、家族の食卓から見えてくるもの、vesta 味の素食文化センター、no.107、2017、58-61、査読無

宇田川妙子、変化のなかのイタリアの食、vesta 味の素食文化センター、no.107、2017、52-55、査読無

#### 【学会発表】(計 3 件)

宇田川妙子、「労働(仕事)」をつくる人たち 現代イタリア社会における「労働」、京大人類学研究会 12 月季節例会、2016 年 12 月 10 日、京都大学(京都府・京都市)

宇田川妙子、イタリアにおける食の多様な意味、関西学院大学 E U 情報センター主催 ミニ・シンポジウム、2016 年 6 月 25 日、大阪茶屋町アプローズ(大阪府・大阪市)

宇田川妙子、現代イタリア社会における結婚の意味、比較家族学会、2016 年 6 月 18 日、近畿大学(大阪府・東大阪市)

#### 【図書】(計 5 件)

宇田川妙子 他、昭和堂、グローバル支援の人類学、2017、271-292、査読有

宇田川妙子 他、日本経済評論社、出会いと結婚、2017、167-196

宇田川妙子 他、世界思想社、仕事の人類学、2016、204-231、査読有

宇田川妙子 他、勉誠出版、『ワールドシネマ・スタディーズ』2016、237-244

宇田川妙子、臨川書店、城壁内からみるイタリア：ジェンダーを問いなおす、2015、217

#### 【その他】

ホームページ等

宇田川妙子、イタリアにおける食の多様な意味、『関西学院大学 E U 情報センター主催 ミニ・シンポジウム 食文化・食生活の日欧比較 報告書』、2016、5-17

宇田川妙子、「イタリア」 ～ (連載 4 回) みんなく世界の旅・シリーズ、毎日小学生新聞、2015 年 8 月 22 日、29 日、9 月 5 日、12 日掲載

宇田川妙子、家族・友人の助け合い イタリア、読売新聞、2015 年 4 月 9 日夕刊掲載

宇田川妙子、イタリアの食と社会関係、TASC Monthly、2015、no.480、3

#### (1) 研究代表者

宇田川 妙子 (UDAGAWA Taeko)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・教授

研究者番号：90211771

## 6. 研究組織